

第9回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演観賞記

平成28年9月9日、金曜日という平日の日程をものともしない、大勢の観客に見守られ、第9回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演が開演した。

私は今回、時間の都合をつけることが出来ず夕公演のみの観賞となったが、第9回を迎えたこの公演で感じたことを書き残しておきたい。

今回の公演は、神奈川県厚木市酒井の相模里神楽、垣澤社中の皆様によるものだった。第8回までの公演では、公演名に掲げるとおり、埼玉県内の江戸里神楽を取り上げてきた。今回県外の団体により公演が行われることは、今までに無い、新しい試みとなっている。

このことについて、当初は少々の心配を抱いた。私自身は里神楽に明るいとは決して言えないが、なにしろ、『楽しくて、わかりやすい「江戸里神楽」公演』のはずだ。看板に掲げた江戸里神楽については何だったのか、9回目にしてネタ切れか、そのようなネガティブな公演になってしまうのでは、ちらっと感じたのである。しかし、これが杞憂であったことは、当日の観客数と会場の雰囲気からすぐに気づいた。第9回を迎えた本公演は「江戸里神楽を見る」公演から「江戸里神楽を考える」ことが出来る公演へと足を踏み出したように思う。

さて、夕公演の演目は神前舞「奉幣之舞」、新作面芝居「紅葉狩」、新作神楽「根国試練」、寿獅子・大黒舞・両面となっていた。

遠く神奈川県の里神楽ではあるものの、開演前には映像により、また開演後は司会者等により、相模里神楽、そして垣澤社中の皆様について情報がもたらされた。これにより、県外のまだ見ぬ里神楽への興味は高まっていった。

神前舞「奉幣之舞」は、神前に奉納される神楽のイメージそのもの、いかにも「神楽」と言えるような舞だった。彩の国さいたま芸術劇場のホールが、その時は神の目前に設けられた神楽殿として祓い清められていった。埼玉県内であっても、社中によって個性は存在する。それを考えれば、やはり神楽というのは同じ形をもって各所で演じられているのだ、と納得した。

奉幣之舞を終えると、次の演目は新作面芝居「紅葉狩」である。これは「面芝居」であり、神楽とはまた違う性格のものである。神楽師が演じるこの芝居は、演者の登場時から明らかに神楽とは異なった。衣装、動き、話の流れ、どれをとってもしっかりと芝居を演じており、先ほどまでいかにも神楽殿として扱われていたように思えたホールは一気に芝居小屋の雰囲気をもち、演目は神に対してではなく、観客に対するものとなった。この切り替えは見事であったし、また、驚かせられた瞬間でもあった。

公演プログラムで記述されているが、埼玉県ではこのような面芝居には出会えない。地域に息づく里神楽やその神楽師は、やはりそれぞれの地域で異なり、その地域での立ち位置のようなものもまた、異なっているに違いないと感じた。歌舞伎テイストを取り入れた芝居が、地域の人々に喜ばれる光景は、想像に難くない。

面芝居で驚かされた後、始まるのは新作神楽「根国試練」である。さて今度は神楽なのか、と思いきや、その肩書は新作神楽となっている。そもそも神楽に新作というのがまずしっくりこない。これはまた何かあるに違いない。司会者からの解説では、演目中の家族関係が現実の社中の家族によって演じられるという。これは、私がこれまでに接してきた神楽では着目もしなかったような部分だった。

果たして、この新作神楽は、この日一番の驚きを与えてくれた。根国試練に登場する神々は、ほとんど言葉は発せず神楽的な舞いを舞いつつも、どうにも人間らしい、親しみのあるキャラクターとなっている。そもそも演目前に社中の家族構成を知らされ、実際の関係性を知って鑑賞するこの物語は、どうやっても人間劇としての面白みを感じる事となる。しかしそもそも地域に息づく神楽社中のこと、演じ手の素性を含めて地域に愛される神楽なのだろうと想像できる。これは、この人間臭さをうまく使った、ユーモラスな明るい演目だった。

特に冒険的であった現代の小道具の登場や、懐かしの歌謡曲を挟んでの場面転換など、里神楽をあくまでも神に奉納する形式立ったものだと思って臨めば面食らうだろう。そういえば、最初の演目で祓い清めた空間はなんのその、客席通路も使っての一大劇であった。しかし、演目中、客席からは楽しげな笑いが漏れ、最後の場面などでは、観客の多くが初めて出会ったのであろうこの社中に、親しみを多分に込めたように感じられる温かな見送りが成されたのである。

そして、このなんとも愉快的な演目の後には、再び神楽を離れ、寿獅子・大黒舞・両面が舞われる。愛称での掛け声をかけられて元気に舞う寿獅子は生き活きと力強く、大黒舞と両面は各々の舞いが明るく華やかである。両面が「両面」たることが観客に伝わった瞬間の観客の反応などは、客席の一体感という面からも興味深いものであった。各地から偶然公演を見に集まった見知らぬ観客たちが、社中への興味と親しみを通じて一つのまとまりを得たように感じた。共通の思いを持つ個々人は、まとまりを得て集団となるのに容易い。この相模里神楽は、様々な演芸を取り入れ地域に愛されることで、地域の人々の気持ちの面での集合を助けているのではないか。地域に入らずに勝手なことをと言われるかもしれないが、私にはそのように思えてならなかった。

今回の公演は、今までに無い県外の里神楽の公演となった。このことは、今まで里神楽について経験や知識を持つ観客に対しては、江戸里神楽に外からアプローチし考えるきっかけとなっただろう。そして、里神楽初心者に対しては、神事としてのイメージではなく、観客となる地域の人々との関係性、演芸としての面を見せてくれることで、まさしく「楽しくて、わかりやすい」ものだったのではないだろうか。

また、今回の公演の「楽しくて、わかりやすい」工夫としては、幕間にイベント的な企画を入れていることもあった。歌手（学生スタッフであった）による飛び入りのミニコンサート、学生スタッフ（司会者たち）を巻き込んでの出し物と、通常の舞台芸術等よりも長い幕間の時間を過ごすための心遣いを感じた。

公演パンフレットは、前回までの公演と同じくボリュームのある、持ち帰ってからも一度楽しめる内容と分量を持っている。今回の演目は風変わりな面があったこともあり、舞台台本が文字として起こされていることが、演目を思い返すのに大いなる手助けとなってくれた。社中に着目した各記事についても、この埼玉県とは違う外の里神楽を体験した後には大きな意味を持つように思う。また、変わらず充実している多言語への翻訳記事が、他国の文化として里神楽に触れた観客の理解の手助けをしてくれていることだろう。分厚いパンフレットは、様々な立場の方にも「楽しくて、わかりやすい」ものとして里神楽に接してもらうための手段の大きなひとつであるのだと感じる。

第9回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演は、今までとは違った観点からの切込みと、これまでと変わらない目的意識をもって行われた。公演内容が順調に、また各回コンセプトを持って行われる現状で、今後同様の公演が行われるならば課題となるのは、観客の多様化への対応と実行委員会とのバランスとなるように思われる。

多くの観客を集め、様々なニーズにこたえ、他地域の文化との懸け橋となる。このように多岐にわたる役割を果たしている公演の実働部隊は、実はそのほとんどが現役の学生スタッフとボランティアによるシニアスタッフで構成されている。公演事業としての充実が図られる一方で、毎回入れ替わる学生スタッフに様々な経験の場を提供する。おそらく、多くの学生スタッフにとって、チケット代を支払ってもらっての公演の提供など初めての事なのかもしれない。

この相反するような両の面を充実させ、その趣旨を守り抜いてきたからこそ、今回の公演がある。その困難は計り知れないが、とにもかくにも、今回の公演が無事に行われたことへの祝意と、なによりも、楽しい公演を提供してくれたことへの謝意をお伝えしたい。

K.N (埼玉県児玉郡神川町在住)